

きつねとぶどう



山の中のきつねのすで、きつねの子がないていました。

「こーんこん、おなかがすいた。」

すると、おやぎつねがいました。

「待つておいで、今おかあさんがおいしいものをとつてきてあげる。」

こぎつねはなくのをやめて、おとなしく待っていました。一時間待ちました。おやぎつねは帰ってきません。二時間待ちました。まだ帰りません。三時間待ちました。それでも帰ってきました。こぎつねはどうとうなきだしました。

「またおなかがすいてきたあ。」

おやぎつねはどうしたのでしょうか。じつはその時、村へ行つてぶどうを一ふきとつてこようと一生けんめいかけていました。

一つ山をこしました。二つ山をこしました。三つの山をこした時、やつと

ぶどうの村へつきました。

「おなかがすいて子どもがないているのです。すみませんが、ぶどうを一ふきいただきま
す。」

おやぎつねはそういう、ぶどうの木にとびあがり、大きなふさを取りました。それをおくわえて、大きいそぎで山の方へもどりました。一つ山をこえ、二つ山をこえ、また三つの山をこしました。きつねのすは、もうすぐ近くになりました。るすのうちにおそろしいわしだに、あの子はさらわれはしなかつたろうか。でも、あれ、こーんこんなきごえがしてあります。おやぎつねは安心しました。と、にわかにつかれがでてきました。持ったぶどうが、重くて重くてたまらなくなつたのです。で、一本の木の下にそのぶどうの一ふさをおいて、やれくたびれたとやすみました。

ところがその時、やすむまもなく、すぐそばでわんわん犬のこえがしました。りょうしが犬をつれてもうそこにきているのです。

どうしましょう。ぶどうどころではありません。

「こぎつねがてつぼうでうたれます。思わずおやぎつねは、大きなこえで呼びました。
「こーんあぶない。はやくにげなさい。」

こぎつねはこのこえにびっくりして、あなたをとび出し、かけてかけて山のおくへにげて行きました。

それから何年たつたでしょうか。長い月日がたちました。しかしおやぎつねはどうとうにわかなに 急に。とつぜんに。

帰つてきませんでした。おかあさんをさがして、山の中を歩いているうち、こぎつねは大きくなりました。

ある時、昔おかあさんとすんでいたすの近くにやつてきました。すると一本の木の下にぶどうがはえていました。そのつるが木にまきのぼり、たくさんのみごとなふさをさがらせていました。

「こんなところにぶどうがあつたかしら。」

こぎつねはふしげに思いながら、そのひとつぶをたべました。何とおいしいぶどうでしょう。

「ああ、おいしい。ああ、おいしい。」

こぎつねはのどをならして、次から次へとたべました。

しかしその時、ふとおかあさんのこえを思い出しました。

「まつておいで、おいしいものをとつてきてあげる。」

すると、そこにぶどうのなつていてるわけがわかりました。

「そうだ。」

そう思うと、今はどこにいるかわからないおかあさんに、こえをあげて、おれいをいました。

「おかあさん、ありがとうございました。」

